

害獣の個体数管理および被害管理技術評価のための生息密度推定法の開発
(自然保護課生物多様性センター)

県内におけるイノシシの生息数を把握し、適切な個体数管理等を実施することを目的として、階層ベイズ法によるイノシシの生息数の推定を行うために、平成26年度県内の各市町の有害捕獲事業において捕獲されたイノシシの捕獲情報を活用し、繁殖特性の調査・検討を行った。

その結果、平成26年度に捕獲されたイノシシ(14,723個体)のうち、メスは6,329個体であり、妊娠が確認された個体(以下、妊娠個体とする。)は194個体であった。最も妊娠率が高かったのは4月(約10%)であり、妊娠率は、12月から上昇し、6月以降に急激に低下したが、夏期～秋期にかけても約1～2%程度個体では妊娠が確認された。なお、捕獲個体における性比には有意な差異は認められなかった。

妊娠個体は20～120kgの小型から大型の個体であったが、妊娠個体数が増加した12月以降に大型の個体から妊娠する傾向が認められた。

また、妊娠個体が確認された地域は、有害捕獲が実施されている地域全域であったが、捕獲個体数その捕獲方法については、箱わなによる捕獲が多かったものの、妊娠の有無と猟具との関係には有意な差異は認められなかった。

以上から、千葉県では、イノシシは主に12～6月にかけて繁殖しているが、少数ではあるものの、夏期から秋期にかけても繁殖する個体がいること、また、春期に生まれた個体のうち、成長が速い個体については秋期に繁殖できる可能性が示唆された。

まとめと今後の課題

本研究から、冬期から春期にかけて妊娠率が上昇する傾向が認められた。すなわち、イノシシの妊娠率の高い冬期から春期を中心として捕獲を実施することにより、個体数の抑制効果を高めることができる可能性がある。

一方で、割合は低いものの、夏期から秋期にも妊娠個体が確認されていること、出産期以降に小型個体が捕獲されていることから、箱わな等による小型個体の捕獲による強制離乳が、イノシシの再発情を促進し、繁殖期を延長させている可能性も示唆された。そのため、イノシシの個体数を抑制するためには、妊娠個体を効果的に捕獲する方法や、ICT等を活用した親子連れの個体を効果的に捕獲する手法の検討が必要である。

なお、繁殖期を正確に評価するためには、胎児の有無のより正確な判定だけでなく、出産後の黄化退縮物の評価(辻・横山2014)や小型個体の出産期の詳細の把握(小寺ほか2012)等の他の手法も合わせた評価が必要となるため、これらの手法についても検討が必要である。